

サラ・バイクウェル著「実存主義者のカフェにて―自由と存在とアプリコットカクテルを(II)」紀伊國屋書店 2024年4月11日刊を読む

実存主義の定義

- (1) フッサールは、つねに、もっと難しい問題、まだ掘り下げていない問題を考えたがっていた。
 - (2) フッサールはなんであれそのときどきで、「もっと難解でわけのわからなそうな」問題、不安と自己不信に陥るような問題に取り組むのが目標だったという。
- (1) 「刺激的ながらも心身の疲労を伴う修業」
 - (2) 「たえまない集中と努力」
 - (3) 「現象を新たな視点で見ることが必要だ」
 - (4) 「みずからの課題に何度も立ち返り、目の前にある現象を見て識別し、記述する」
 - (5) 〈これが仕事のスタイル〉であると同時に、〈現象学のわかりやすい定義〉。
- (1) では、〈現象学とは〉いったいなにか。
 - (2) そもそも、それは理論というよりはひとつの方法であり、思い切り簡潔に言ってしまえば、こういう命令である。「現象を記述せよ」
- (1) 記述とはその言葉どおりで、〈現象学者の仕事は記述すること〉にある。
 - (2) それこそ、フッサールが学生たちに徹底させていたやりかただ。
 - (3) 要するに、《気を逸らすもの、習慣、ありふれた思考、先入観、広く信じられている考えを排除》し、フッサールのいう《「事象そのもの」わたしたちの注意を戻させる》という意味だ。
 - (4) 目の前のものをじっと見つめ、思い込みではなく、あらわれているまさにそのままを捉えなければならない。
- (1) そのようにして注意深く記述された当の事象が現象(フェノメナ)と呼ばれる。
 - (2) 現象という言葉は現象学者にとって特別な意味を持っている。
 - (3) それは、日常の事物や物体や出来事すべてを、それが現実に存在(実在)するものであろうとなかろうと、わたしの経験にあらわれるままに捉えるということだ。
- (1) たとえば、ここに一杯のコーヒーがあるとする。
 - (2) (フッサールはコーヒーが好きだ。レイモン・アロンがアプリコットカクテルで現象学を語るずっと前から、フッサールはゼミで学生たちにこう話していた。
 - (3) コーヒーを持ってきてくれれば、それを使って現象学を説明できる。

7. (1)さて、コーヒーとは何か？

(2)その成分やコーヒーノキの生態という観点から定義することはできるし、コーヒー豆が育て輸出され、挽かれて粉末の成分が熱湯で抽出され、容器に注がれて人間に供され、口から摂取されるプロセスを要約して付け加えてもいい。

(3)あるいはカフェインが体におよぼす影響を分析したり、コーヒー豆の貿易について論じたりすることもできる。

(4)百科事典を開けば、そういう事実はいくらでも載っているが、それでもなお、目の前にあるほかならぬこのコーヒーとはなにかを説明したことはない。

(5)また、別の方法を試したければ、純粹に個人的な感傷にふけることもできる。

(6)マルセル・ブルーストが紅茶にマドレーヌを浸して過去を思い出し、何巻にもわたる大河小説を書いたように。

(7)しかしそのやりかたでも、やはりこの一杯のコーヒーを、直接的に与えられる現象として理解することはできない。

8. (1)それならば、こんなふうに言ってみたらどうだろう。

(2)一瞬、土のような匂いがして、豊かな香りが漂う。それは液体の表面から渦巻き状に立ちのぼる蒸気からもたらされる。カップを唇に近づけると、それは静かに揺れる液体であり、手のなかの分厚いカップに入った重みである。徐々に湯気が近づいてきて、舌に濃い味わいを感じ、まずはわずかな苦みが生じたあと、快い温もりがカップから体へと伝わって心身をリラックスさせ、長く続く覚醒と気分の爽快さが予感される。

(3)この予感、期待に満ちた感覚、香り、色、味わい。そのすべてが、現象としてのこのコーヒーの一部分であり、経験を通して立ちあらわれてくるものである。

9. (1)もしその全部を単なる"主観的"要素として排除し、目の前のコーヒーを"客観的"に語ろうとすると、現象としてのこのコーヒーはなにも残らなくなってしまう。

(2)なぜなら、コーヒーは、それを飲んでいるわたしの経験のなかにあらわれるものだからだ。

(3)経験としての一杯のコーヒーこそ、わたしが確実に語れるものであり、そのほかの、豆の生育や成分に関する事実などはすべて伝聞にすぎない。

(4)それはそれでおもしろい情報かもしれないが、現象学者にとっては無意味なのだ。

10. (1)フッサールによれば、一杯のコーヒーを現象学的に記述するには、抽象的な仮説も感覚的な連想も脇に置かなければならない。

(2)そうすることで、今日の前にあるこの黒っぽい香り豊かな現象に集中できる。

(3)このように余分なものを「脇に置き」たり「括弧に入れ」たりすることを、フッサールは「エポケー」と呼んだ。

(4)「エポケー」という言葉は、古代ギリシャ哲学の懐疑派から拝借したもので、彼らはこの世

界についての判断を全般的に留保するという意味で使った。

(5)フッサールの場合、ときに現象学的"還元"の意味でこの言葉を用いている。

(6)つまり、コーヒーとは、"ほんとうは"なにかという余計な理屈を取り除き、目の前に立ちのぼる強い香りという現象だけが残るようにしたのである。

11. (1)その結果、おおいなる解放がもたらされた。

(2)現象学のおかげで、わたしは自分が体験したコーヒーを真面目な研究対象として語る自由を得たのだ。

(3)同じように、現象学的に捉えることによってしか把握できないさまざまな事象についても語れるようになる。

(4)コーヒーの描写に似たわかりやすい例を挙げれば、それはワインのテイスティングだ。

(5)専門家にとっては、テイスティングという行為自体がいわば現象学の実践であり、その際、ワインの特徴を識別する能力と、言葉で描写する能力が同じだけ必要になる。

P60 ~ 63

<コメント>

(1)「フッサールの現象学」について最もわかりやすい説明。「エポケー(思考停止)」についてもわかりやすく説明をしていただき有難い。是非、御一読を。

2024年5月6日(月)

林 明 夫